

# 中国の風俗と時代観から世界史を語る書

山本 英史

岸本美緒著  
風俗と時代観  
明清史論集1



四六判 322頁  
研文出版 [2940円]

本書は著者の岸本美緒さんが一九九〇年代以来講座座物や特集などの依頼により比較的広範な読者層に向けて著してきた文章のうち時代区分論と風俗論を中心にまとめたもので、市場論と暴力論を中心とするもう一つの論集『地域社会論再考 明清史論集2』と対をなしている。

本書のコンセプトは「相対的に肩の凝らない文章を集め」(三二〇頁)ものだというのが、なかなかどうして、そこに収められた諸論考は「昼寝の友として気楽に読」めるところか、また「睡眠導入のお役に立つ」どころか、それまでの眠気も一発で醒め、威儀を正して読み直さねばならなくなるはなはだ刺激的な内容を備えている。著者の近年の歴史観が凝縮された価値ある一冊といえよう。

本書は三編一章からなる。慣例にしたがって本書の目次

を以下に掲げる。

## I 歴史変動と時代区分

時代区分論／時代区分論の現在／風俗と時代観／現代歴史学と「伝統社会」形成論／一八世紀の中国と世界

## II 身分と風俗

明清時代の身分感覚／名刺の効用——明清時代における士大夫の交際／「老爺」と「相公」——呼称からみた地方社会の階層感覚

## III 歴史のなかの風

歴史のなかの「風」／China-centered approach?／アジアからの諸視角——「交錯」と「対話」

ひとえに紙幅の関係から、このうちいくつかの論考を恣意的に選んで紹介する。まずIの《時代区分論》は一九七〇

年前後に刊行された『岩波講座世界歴史』の後を受けて一九九〇年代後半に続刊された新講座に執筆したもので、前講座の基底にあつた「世界史の基本法則」的時代区分論に代わる新たな方法論の模索が強く意識されている。《時代区分論の現在》は近二〇年における歴史学の潮流の大きな変化を説いている。ここではまず従来の時代区分論が社会というものをある種の整合的構造を備えた実態としてとらえ、それは段階を踏まえて発展するものであり、その発展は共通の物差しで計れるという認識を前提としていたことの問題性を指摘する。そして、このような本質論的な枠組みの妥当性が疑問視されている現在、「未来は、必然的な発展の結果として予測可能なものではなく、むしろわれわれの選択の問題としてある」のであり、「それと表裏して、歴史も、必然的な方向性にそつた発展過程というよりは、状況に応じた人々の試行錯誤の蓄積と見なされる」ため、「探究すべき問題は、アプリアリに想定された「発展」の指標や論理を対象社会のなかに見つけだしてゆくことではなく、人々の具体的な行動の理解そのもの」(二三頁)だと主張する。加えて近年の時代区分論では、一国的な孤立したものではなく、かといって「世界史」を最初から一体のものとして考えるのでもなく、「さまざまな地域がぶつかり合うところに生み出される共通のり

ズムのなか」(四六頁)にその基礎を置こうとする傾向があるという。総じて著者自身はそうした新しい傾向のなかで中国史を考え、一六一―一八世紀の変動の背景には銀の大量流入に伴う交易の活発化と社会の流動化、そして政治秩序再編の動きという、絶対主義や幕藩制の成立に与えたものと共通する世界的な衝撃があり、それゆえその時代を「当時の人々が不安のなかで新しい秩序を模索した時代」という意味で「近世」と位置づける。なお《風俗と時代観》では先に提案した当時の「人々の具体的な行動の理解」の実践として、顧炎武らの明末清初の知識人の時代観を明らかにする。

Ⅱの《明清時代の身分感覚》は、服装・乗物などの可視的シンボルや相互の呼称、交際のあり方などの具体的風俗現象を通して明清時代の人々が抱く社会的上下感覚の様相を探ろうとしたもの。そこで明らかにするのは第一に当時の人々がこうした服装を感知し呼称を意識的に用いることで彼らの階層感覚を表現していたこと、第二に明末にあつて上層の人々に対する服装や呼称が濫用された結果、それらはインフレ化していったことだという。また明末は交際のあり方として擬似的血縁関係を伴う個人的従属関係を結ぶことが盛んに行われた時代であるとし、それを科挙受験で生じる門生・同年などの関係、名刺の効用、「賤」感覚の意識変化などを通して

説明する。さらに、そうしたあり方は清代になると紳士の威信の低下、武官の地位の上昇という階層感覚の変化、および皇帝を頂点とする一元的な秩序の下、官僚・民間勢力の私権化を排する政策のなかで大きく変わったという。《名刺の効用》は明中期からその形態に変化が現れる名刺が士大夫の交際において個々人間の緊密な関係を作り上げていく重要な小道具であった点に着目し、その華美化や自称の複雑化などは当時の人々の社会変動への対応、すなわち激しい競争と没落の危機、それに伴う不安感のなかで権勢者との関係を積極的に形成しようとする投機的な側面が反映されたものと見る。《老爺》と「相公」は、呼称の問題に特化して地域住民による「認知」という方向から郷紳権力の成り立ちを考察したもので、明末、官僚・紳士に対する敬称として広く用いられた呼称は権勢認知の重要な媒体の一つであったという。

Ⅲの《歴史のなかの「風」》は、明清時代の知識人にとって「風」とは「逆らうことのできない力をもちながらしかと目に見えず、捉えどころがないにもかかわらずたしかに存在すると感じられる世の変化」(二六六頁)であったことを論じたエッセイである。

かねがね感じていたことであるが、著者の研究には二つの対照的な面があるようだ。一つは戦後日本の歴史学界が構築

してきた「大理論」に対して果敢に挑み、その問題点を尖鋭に指摘しながら新しい歴史像を堅実に構築していく、いわばハードボイルド的論調を基調とするもの、もう一つは多彩な小説や在野知識人の筆記を通して従来あまり顧みられなかった対象を取り上げ、当時の人々の選択とか感覚とかという、これまたあまり重視されてこなかった視角から当時のリアルな社会を再現しようとする、いわば温雅な論調を基調とするもので、これらは著者の研究の両輪をなしている。本書でいえば前者はⅠのとりわけ時代区分論において集中的に展開され、後者はⅡの風俗論において遺憾なく發揮されている。本書はいわばそのエッセンスであるといえよう。以下、本書を通読して感じたことをいくつか挙げておく。

第一は著者の「近世」以外の時代に抱くイメージである。著者の「近世」観についてはすでに専著もあり、本書でも明快な説明がなされているが、「近世」以外の時代観についてはさほど触れられていない。広い意味で世界史的時代区分が可能という著者なればこそ、他の時代についての言及を求めてもあながち「望蜀」とはいえまい。とりわけ従来注目を浴びてきた唐宋変革期とはどんな時代であり、それは世界のなかでいかなる共時性を持つものなのか、これについては著者の口からぜひ語ってもらいたいと考える。

第二は著者の中国の一六——一八世紀を研究対象とする目的のあり方である。本書ではそれを「究極的には、さまざまな社会の個性的なあり方を理解しようとする。ことよつて、われわれの視野を広げ、不確実な未来に向けての構想力のヒントを得ることにある」(二五頁)とし、「彼らが不安のなかで模索した課題——人間にとつてあるべき秩序はどのようなものか、そしてそもそも秩序とはいかにして可能なのか——は、時空を超えた普遍的な課題として私の心を直接に掴む。その意味では、私がこの時代に対して抱いている興味は、「同時代的」なものであるといつてもよい」(三一頁)と述べる。この「同時代的興味」という表現は本書の随所に見られ、著者の研究目的を端的に示している。しかし、この目的を突き詰めれば、その対象がなぜ中国なのか、なぜ明清時代でなく

てはならないのかという問題が相対化する気がする。その点では戦前の認識に対する反省から中国社会停滞論批判をめざした戦後日本の明清史研究が、たといそれが観念的・向目的であつたにせよ、日本人である我々が他国の、しかも特定の時代を研究する意義を明白にしていたのとは対照的である。これについてはどう考えればよいか。

第三は清代が果たして著者のイメージするような紳士の威信の低下とそれに対する武官の台頭、さらに皇帝を頂点とする一元的な秩序再編化の時代であつたかという問題である。清朝が中国を統治した約二七〇年間を三分すれば、その第一期に当たる雍正期までは清朝が中国支配の確立をめざす、いわば過渡期であり、その点在地社会もまた集権的な王朝の原則的統制を免れなかつたという条件を考慮する必要がある

□新刊□

# ことばの散歩道Ⅳ

## 日本語と中国語のヴォイス

### 教師のための中国語音声学

甚ダシクハ  
解スルヲ求メズ

上野恵司 著

日中対照  
言語学会

平井勝利 著

曹操、陶淵明から兼好法師、落語の志ん生師匠、野球の鶴岡監督まで、心に沁みる名句と抱腹の迷言を愉しむ。日中言語文化比較エッセイ。四六判 ■1680円

【執筆者 掲載順】 中島悦子 / 田中寛 / 高橋弥守彦 / 張岩紅 / 竹島毅 / 李所成 / 王黎今 / 何宝年 / 廖郁雯 / 早津恵美子 / 姚麗玲 / 張黎 / 何統三義 / 尹洪波 / 王学群 A5判 ■2940円

中国語音声の諸現象について、体系的、構造的、法的に解説。教師が自信を持って説明指導できるように具体的な事例を挙げて説明。中国語教師必読の書。A5判 ■2100円

白帝社

※価格は税込

〒171-0014 東京都豊島区池袋 2-65-1  
TEL 03-3986-3271 FAX 03-3986-3272  
http://www.hakuteisha.co.jp

か。問題はその支配が確立・安定した第二期の乾隆期にそれがどうなるかである。私見によれば、紳士は第一期に見られた一時的な戒厳状況に耐えて再び威信を恢復し、王朝体制のなかに取り込まれつつもその後なおしたたかに地域に固有の伝統権力を維持していったように感じる。紳士の在地社会での態様を活写した代表的な小説『儒林外史』がこの時期に刊行されたのもこれと無縁ではないのではなからうか。

最後は「風」についてである。著者は《歴史のなかの「風」》において「漢字文化圏に住む我々は「風」という比喩のもつ感覚を中国の人々とある程度共有できるのかも知れない」(二六七頁)と述べている。以前、その場の状況を理解できない日本の若者をKY——空気(風?)が読めない——と揶揄したことがあったが、その点では著者の言うことにも一理ある。問題は共有できる範囲が漢字文化圏に止まるか否かといったところであろう。

以上、思いつくままに感想を述べた。実証研究という「地」に足をしっかりとつけた上で現代歴史学が抱える多くの難問に対し真摯にその解決を求める著者の姿勢はいつもながら敬服に値する。本書はゆめ寝そべって読むようなものではない。

(やまもと・えいし 慶應義塾大学)

#### 日中対照言語学会第28回大会のご案内

▼日時・12月9日(日) 9時00分～17時30分▼会場・大阪産業大学梅田サテライト(JR大阪駅南口下車、阪神百貨店右の通りを直進、徒歩5分、大阪駅前第三ビル19階。大阪市北区梅田1-1-3 ☎06-6431-5521)▼参加費・1000円(会員、非会員共通)▼研究発表・郭芳菲「中国語の『対面』、『旁边』、『周囲』、『周辺』の用い方及び日本語訳の特徴」、孫樹喬「日中対訳における意志表現の「スル」の対訳形式の選択」、古賀悠太郎「『視点』研究における二人称の位置付けについて——「やる／くれる」、「行く／来る」、「去／来」を例に——」、李慧「条件接続表現における日中対照研究——「たら」「なら」に対応する中国語表現を中心に」、邱麗君「『这/那』の指示機能虚化から見た中日指示詞の非対応」、長野由季「日本語助数詞「枚」と関連している中国語量詞「张」「片」「面」「块」における認知分析」、藤田昌志「日本語と中国語の誤用例研究」、王慶「選択解釈と疑問解釈」、高橋弥守彦「日中対照関係から見る中国語の使役表現について」